

# 英語の不変化詞の意味と語彙的意味として 内在化されたメタファー

石井 康毅

(東京外国語大学大学院博士後期課程)

## 概要

英語の不変化詞の中核語義は、物理空間を指示する用法である「狭義の字義表現」と、そこから抽出されたプロトタイプ的な概念である「イメージ・スキーマ」から構成されている。そしてそこからの比喩拡張によって得られる、成人母語話者はメタファーだとは感じない抽象的な語義と、それを体現する「語彙的意味として内在化されたメタファー」のレベルがある。(以降これを「語彙化されたメタファー」と呼ぶ。)そしてその拡張のさらに先に、伝統的ないわゆるメタファーに相当する「狭義のメタファー」のレベルがある。

「語彙化されたメタファー」は、通常は比喩的だとはみなされないという点では字義通りの意味としての性質を持っているが、概念メタファーに依拠した表現であるという点では比喩的な意味としての性質も持っている。しかし、「語彙化されたメタファー」はプロトタイプとしてのイメージ・スキーマの体現事例ではなく、また比喩表現であるけれども有標な表現ではないことから、「狭義の字義表現」・「狭義のメタファー」のいずれとも違う、具体的な意味から抽象的な意味への橋渡しとなる「語彙化されたメタファー」という特別な区分を想定するのは妥当である。この語彙化されたメタファーの区分こそが、具体的な指示から抽象的な意味への拡張の基礎として重要な役割を果たしているのである。さらに、この区分を想定することにより、第一言語習得期の幼児や第二言語習得中の学習者が示す学習上の困難の一部をうまく説明できる。

本稿では、不変化詞の意味に見られる、この「語彙化されたメタファー」という区分の妥当性を、コーパスからのデータや心理言語学の実験データなどに基づいて論じる。

## 1. 伝統的な狭い意味での「メタファー」と新しい広い意味での「メタファー」

最初に、本稿で議論の土台となる「メタファー」(metaphor)について確認する。ただし、メタファー研究の歴史や様々なアプローチについて触れるのは本稿の目的を超えているため、本稿に直接関係するメタファーの性質等についてごく簡単に述べるにとどめる。

本稿では、メタファーを次のように定義する。

メタファー：基本的・本質的・字義通りの意味が属するドメインとは異なるドメ

インに属する事物を本来的に指すが、言語共同体で共有される百科的知識<sup>1</sup>・文脈的知識・個人の経験的知識を参照して発話・解釈がなされる言語表現。

Lakoff and Johnson (1980) 以前は、メタファーは特別な修辞表現だと考えられていた。そして現在でも一般的にはそう考えられることが多い。しかし彼らは、メタファーはそれと認識されずとも非常に頻繁に用いられ、実は表層的な言語のみならず思考や行動にも幅広く見られるものであるということを明らかにした。

彼らが唱えた理論の中でも重要なものが、概念間の対応関係を述べた「概念メタファー」(conceptual metaphor) である。CONTAINER, SOURCE-PATH-GOAL などの空間概念が基盤となり、それらが複合し、さらに現実世界の事物の構造と組み合わせさせて、AN ACTIVITY IS A SUBSTANCE (Lakoff and Johnson 1980: 66), MORE IS UP; LESS IS DOWN (*Ibid.*: 15) などの複合的な概念メタファーが生じる。

本稿で議論の対象とする英語の空間に関するメタファーは、以下の例に見られるように、不変化詞を伴う表現(動詞+前置詞句/副詞, 前置詞+名詞句)で表現されることが多く、さらに、ほとんどの場合1つ以上の概念メタファーが背後にある。

(1) 概念メタファー: AN ARGUMENT IS A CONTAINER

- a. That argument *has holes in it*.
- b. You won't *find* that idea *in* his argument.
- c. That conclusion *falls out of* my argument.

(*Ibid.*: 92)

(2) 概念メタファー: HAPPY IS UP; SAD IS DOWN

- a. I'm feeling *up*.
- b. I'm feeling *down*.
- c. I *fell* into a depression.

(*Ibid.*: 15)

なお、空間の意味を持つ前置詞とそれと同形の副詞 (*turn over, give up* 等) を合わせて、本稿では「不変化詞」と呼ぶ。両者を区別する統語的な手段はあるが、補部の省略と考えれば前置詞と考えられるような副詞もあり、意味的には明確に区切れない (Quirk *et al.* 1985; Biber *et al.* 1999) ためである。

## 2. 不変化詞の語義に内在化されたメタファーの存在

石井 (2004) では典型的なメタファーのみならず、語彙の意味の中に吸収されてはいるけれども比喩的な側面を持つ語の意味までを含めて広義の「メタファー」として扱い、不変化詞の持つ具体的な物理的空間に関する中心的な意味と、話者の認知空間の中で拡張さ

---

<sup>1</sup> 以下で述べる概念メタファーはこれに該当する。

れた比喩的な意味までが語の字義通りの意味であるというモデルを提案し、その上で第一言語としての英語の習得期にある子供は、不変化詞が持つ物理的空間に関する意味から先に習得し、不変化詞の字義通りの意味に含まれてはいるが比喩的である意味は習得時期が遅い傾向があるということを示した。

この、メタファー拡張を受けてはいるが語彙の意味として内在化されている意味のことを「語彙化されたメタファー」と呼び、いわゆるメタファーを「狭義のメタファー」呼んだが、本稿でもこの名称を使用する。以下の議論ではさらに、物理空間を指示し、広義のメタファーでもない用法を「狭義の字義表現」と呼ぶ。

詳しくは3節でこのモデルに改訂を加えながら論じるが、上記の3つの区分の例を挙げておく。(3)が狭義の字義表現、(4a-b)が語彙化されたメタファー、(5)が狭義のメタファーの例である。

- (3) The doll is *in* the box. 「人形はその箱の中にある。」
- (4) a. The machine got *out of* control. 「機械が制御不能になった。」  
b. My enthusiasm got *out of* control. 「私は熱意を抑えきれなくなった。」
- (5) Happiness is *in* the box. (贈り物などの手にすると幸せになるようなものが箱の中に入っているという状況で) 「幸せがその箱の中にある。」

語彙化されたメタファーは、大人の母語話者にとってはもはや比喩的に拡張されたものという意識はなく、言われて考えてみれば追認できるという、いわば語源的な情報のようなものである。つまり、例えば(4b)の文を発話した、あるいは聞いた人は、「熱意(enthusiasm)が制御下の状態(control)から外に出た(got out of)というのは、実際に動きを伴ってある範囲の外に出たのではないのだからメタファーだ」などとは普通は思わないだろうが、そう言われればなるほどと思うだろう。そしてこれは、「‘enthusiasm’は(心の)中に(en)神(thus; ‘theology’などと同様にギリシア語の‘theos’より)がいるような状態だから『熱中』という意味だ」などと考える人は普通はいないが、そう言われれば(相応の知識があれば)なるほどと思えるということと似ている。上で「いわば語源的な情報のようなもの」としたのは、このように相互に似た関係があるためである。語彙化されたメタファーは、通常は比喩的だとはみなされないという点で字義通りの意味としての性質を持っているが、それに加えて、3.2.で論じるように概念メタファーに依拠した表現であるという点で比喩的な意味としての性質も持っている。「語彙化された」というのは「過程を描写する慣習化された方法」(conventionalized way of describing the process; Cameron 1999: 108)であるということと同じとも言えるが、いずれにしても語彙化されたメタファーの意味は狭義のメタファーではなく、広い意味での字義通りの意味と考えることが妥当だと考える。

この分類については以降詳細に取り上げて論じるが、以下この分類をもとに議論を進めていく。

### 3. 不変化詞の意味の区分

本節では2節で示した不変化詞の意味・用法の区分に関して、狭義の字義表現、語彙化されたメタファー、狭義のメタファーの3つの分類の根拠や性質をそれぞれ論じ、さらにその境界について論じる。

#### 3.1. 狭義の字義表現

筆者は、不変化詞の中核語義はプロトタイプ<sup>2</sup>としてのイメージ・スキーマ<sup>3</sup>とそれを体現した狭義の字義表現に見られる指示であると主張するが、これに関する詳しい議論は稿を改めて論じる(石井 2005)。ここでは不変化詞の意味の中核がプロトタイプとしてのイメージ・スキーマであるということをサポートする先行研究3点に触れ、その後で具体例を挙げるにとどめる。

1つ目の研究は、アメリカの母語話者の大学生に、指定した不変化詞(*at*, *on*, *in*)を使って自由に作文させるという実験を行った Rice (1996: 148-152) の報告である。Rice は、不変化詞の意味を *spatial* (例: *I fell asleep at the library.*), *temporal* (例: *I'll be home at 10 p.m.*), *abstract* (例: *At least it was hers.*), *phrasal verb* (例: *What are you looking at me for?*) に分類し、それぞれの範疇への分布状況を調査した。その結果、空間の意味が想起される割合が明らかに高く (*at* は 57/100, *on* は 57/100, *in* は 60/100), さらに各分類の典型文とさまざまな文を比較させるという実験の結果、不変化詞の意味においても典型事例と非典型事例の間に連続的推移があるということが明らかになった。これは、空間に関する意味・用法が不変化詞のプロトタイプのな中核語義であるという本稿の主張をサポートするデータであると言える。

2つ目は、言語習得の観点から空間のイメージ・スキーマの重要性を示した Mandler (1991) の研究である。Mandler は、まだ歩く前の幼児(5-8ヶ月)でさえも *in* に相当する CONTAINMENT, *on* に相当する SUPPORT の概念を理解しているということを示す実験<sup>4</sup>を紹介している。その上で、子供はまず知覚や感覚運動的な手順により身の回りの事物や事態を認識し、細部に関する情報はそぎ落としながらも空間的な構造はその本質的部分として保持しつつ、イメージ・スキーマの形に構築し、さらにそれを言語に合うように必要に応じて再構築すると主張している(Mandler 1991: 418)。これは空間のイメージ・スキーマがいかにかに人間の思考の根本を形成しているかということを示している。

3つ目の研究は、Tyler and Evans (2003) のものである。彼らは、空間の場面というのはそこにある要素(トラジェクター・ランドマーク等)間の相互作用を本来的に内包し(例えば *in* が表現する場面は“containment”を内包する)、そのため、(英語では不変化詞が表現

<sup>2</sup> 「プロトタイプ」(prototype)とは、カテゴリーにおける典型事例のことである。例えば‘bird’のプロトタイプは‘robin’で、‘penguin’は周縁的なメンバーであり(Rosch 1973)、『climb’のプロトタイプは足だけでなく手も使って苦労しながら登ることである(Fillmore 1982)。なお、不変化詞の「プロトタイプ」は、具体的な典型例が存在する‘bird’などの類のプロトタイプとは異なり、また他の呼び方を提唱する研究もあるが、本稿では議論を簡便にするため、不変化詞が持つ典型的な空間の意味を「プロトタイプ」と呼ぶ。

<sup>3</sup> 「イメージ・スキーマ」(image schema)とは、個々の具体的な事象から個別部分を捨象し、共通部分を抽象して得られる超抽象イメージのことである。

<sup>4</sup> 容器に物を隠したりして子供の反応を確認する実験。

することが多い) 空間の関係は世界において客観的に存在しているというよりは、本質的に概念的なものであるとしている (Tyler and Evans 2003: 50-51)。彼らは上述の Mandler (1991) に言及しながら、ある種の日々生じる経験が意味のあるものであるために、概念的な構造あるいは概念 (すなわちイメージ・スキーマ) に再記述されるとしている。

このプロトタイプとしての空間の概念であるイメージ・スキーマを具体化した表現が、筆者が「狭義の字義表現」と呼ぶものである。具体的には (6) のような例が該当する。

- (6) a. The blind is *down*. 「ブラインドは下がっている。」(誰が見てもブラインドが下がっている状態を描写している。)
- b. walk *down* the hill 「歩いて丘を下りる」(誰が見ても丘を下りて行く様子を描写している。)

実際の言語使用における狭義の字義表現の具体例を挙げる。BNC<sup>5</sup> で不変化詞 *in* と *at* を含む文 50 例を抽出した<sup>6</sup> ものを文脈の中で確認して、該当の不変化詞の用法を狭義の字義表現、語彙化されたメタファー、狭義のメタファー (該当例なし)、その他 (固有名の一部と話し言葉コーパスにおいて断片的であり確定できないもの) に分類した<sup>7</sup> 結果、狭義の字義表現に分類されたものの一部が (7-8)<sup>8</sup> である。

- (7) a. Through the window, they saw empty glasses on the bar, dishes *in* the sink, the TV on. (ABS 1161)
- b. He was born *in* Edinburgh, .... (B1D 390)
- c. Of the children Rachel was the worst injured, with tiny pieces of glass from the windscreen *in* her eyes, .... (CDS 853)
- (8) a. Philip looked *at* her. (ABX 1317) (前置詞付き動詞 (prepositional verb; Biber *et al.* 1999: 403) “look at”)
- b. ...., as SCCs were formed, so each would appoint a number of ‘Friendly Visitors’ to interview the school-leavers and their parents *at* home .... (B1T 373)
- c. Glycine *at* position 79, which is present in all H1 molecules, is involved in making a sharp bend in the polypeptide chain, in going from the end of helix III into the  $\beta$ -hairpin. (CRM 10937)

今回調べた各 50 例の中では、狭義の字義表現として用いられている *in* (7) は 10 例, *at*

<sup>5</sup> 現代イギリス英語 1 億語からなるコーパスである the Second Edition of the British National Corpus.

<sup>6</sup> 抽出方法は、まず *in* と *at* を含む文を BNC から全て抽出した。その中で行番号が行数の 50 分の 1 から小数点以下を切り捨てた値で割り切れる場合にその文を例として採用した。例えば *in* を含む文は 1,466,898 文あったため、その 50 分の 1 から小数点以下を切り捨てた値である 29,337 で行数が割り切れる文 (29,337 文目, 58,674 文目, 等) を例として取得した。

<sup>7</sup> 1 文中に該当不変化詞が複数回出現する場合は最初のものだけを分類の対象とした。

<sup>8</sup> 末尾の括弧内には引用した文の ID を付し、文が長い場合には適宜省略し、前後の文脈が必要なものは適宜付し、不変化詞はイタリックにより強調した。以下の BNC からの用例についても同様。

(8) は 20 例であった。

### 3.2. 語彙化されたメタファー

#### 3.2.1. 概念メタファーが背後にある語彙化されたメタファー

「語彙化されたメタファー」に該当するのは、主体的な事物の把握がより重要になっていて、ほとんどの場合 1 つ以上の概念メタファーが使われている表現である。ただし 2 節で述べたように、語彙化されたメタファーは、成人母語話者にとっては、もはや比喻拡張されたものという意識はない。具体的には以下のような例が該当する。

- (9) *In my view, ...* 「私の考えでは・・・」(概念主体の頭の中にある *my view* という領域内を指している。概念メタファーは *VISUAL FIELDS ARE CONTAINERS* (Lakoff and Johnson 1980: 30) <sup>9</sup>。)
- (10) *She is in white today.* 「彼女は今日は白い服を着ている。」(たとえ全身真っ白の衣服を着ていなくても、衣服の色が白色であるという抽象的領域に属していると概念主体が認識している。概念メタファーは *CLOTHES COLORS ARE CONTAINERS* とでも言えよう。)
- (11) *I'm down with flu.* 「風邪で寝込んでいる。」(通常健康な状態をランドマークとし、そこから健康状態が落ちている。概念メタファーは *HEALTH AND LIFE ARE UP; SICKNESS AND DEATH ARE DOWN* (*Ibid.*: 15)。
- (12) *The telephone line is down.* 「電話が使えなくなっている。」(通常の問題なく電話が使える状態をランドマークとし、そこから利用可能性(あるいは利用価値)が落ちている。概念メタファーは *OPERATING IS UP; NOT OPERATING IS DOWN* とでも言えよう。)

(9) と (10) は客体的な空間ではなく、概念主体の心の中で想定される、空間に準ずる場をベースとし、ランドマークが(抽象的にはあるが)明示的に存在するような意味(特定のランドマークがある認知場に関する意味)である。(11) と (12) は同じく概念主体の心の中で想定される、空間に準ずる場をベースとしているものの、ランドマークが明示されておらず、代わりに概念主体が「通常」と考える状態がランドマークになっているような意味(通常の状態がランドマークである認知場に関する意味)である。

#### 3.2.2. 句動詞

動詞と不変化詞から成り、その意味を足し合わせただけでは得られない意味を持つ、いわゆる句動詞は、これまで論じてきた語彙化されたメタファーの区分に分類されると考えられる。例えば“*find out*”「探し出す」という句動詞は、‘*find*’「見つける」と‘*out*’「外に」

<sup>9</sup> 概念メタファーは予め決まった一群があり、大多数の研究者がそれに同意しているというようなものではないため、ある特定の文の背後にある概念メタファーは考えようによって様々なものを想定することが可能な場合が多い。

という各語の意味の他に、「見えるものは外にある（隠れていない）」というようなことを指定する概念メタファー（VISIBLE IS OUT とでも言うべきもの）が合わさって、句動詞全体の意味が得られる。

先行研究を見ると、Hampe（2000）も、動詞と不変化詞それぞれの字義通りの意味と、（多くの場合複数の）概念メタファーが組み合わさって句動詞の意味が構築されると指摘している<sup>10</sup>。

Bolinger（1971: 112-115）は動詞と不変化詞の結合を以下の3つに分類した。

1. first-level stereotype: 単に動詞と不変化詞を字義通りの意味で結合させたもの
2. second-level stereotype: 句動詞
3. third-level stereotype: イディオム（“put on the dog” 「気取る」など）

そして、2の second-level stereotype をさらに2つに分類した。

- 2a. first-level metaphor: 句動詞のうち、不変化詞のみが比喩的であるもの（“go up” 「上に行く」に対する“load up” 「積み込む」など）
- 2b. second-level metaphor: 句動詞全体が比喩的であるもの（“make up a bed” 「ベッドを整える」，“rub out a mistake” 「誤りを消す」に対する“make up a face” 「顔をしかめる」，“rub out an adversary” 「敵対者を殺す」など）

Bolinger の議論は句動詞に関するものであるが、first-level stereotype は筆者の分類による不変化詞の狭義の字義表現に、second-level stereotype は語彙化されたメタファーに、third-level stereotype は狭義のメタファーに、それぞれ包含され、分類の合致が見られる。

また、句動詞は表現が固定的であり、概念メタファーの制約を受ける共起語の交換可能性は、語彙化されたメタファーの中でも低い。

### 3.2.3. 語彙化されたメタファーに分類されるコーパスからの具体例

BNCに見られる、実際の言語使用における語彙化されたメタファーの具体例としては、以下のようなものが挙げられる。

- (13) a. *In* 1923 Van Der Meulen applied for the post of consul there .... (A4J40) (時間表現)
- b. It must be borne *in* mind that there is a crucial distinction between crisis management and crisis resolution. (APD 83)
- c. At one point, *in* fact, everything he had recorded, both acoustically and electrically, could be obtained on LP. (ED6 3036)
- (14) a. Terry is hoping to take a Sabbatical *at* some stage this year. (A7K 851) (時間表現)
- b. ‘He’s got your best interests *at* heart, you know.’ (AEB 514)
- c. We fought *at* close range, not more than twenty steps apart, .... (ALX 814)

<sup>10</sup> 例えば、“face up to” 「(問題など)に直面する」は PROBLEMS ARE OBSTACLES, CLOSE IS UP, ACTIVE IS UP, PURPOSEFUL ACTION IS MOTION TOWARDS A GOAL などの概念メタファーを使って理解されるという。

今回調べた各 50 例の中では、語彙化されたメタファーの表現として用いられている *in* (13) は 38 例、*at* (14) は 28 例であった。

### 3.2.4. 語彙化されたメタファーを区分する意義

ここでは、成人母語話者は区別しない狭義の字義表現と語彙化されたメタファーをなぜ区分する必要があるのかを検討する。語彙化されたメタファーを設定した理由は以下の通りである。

語彙化されたメタファーは

1. プロトタイプとしてのイメージ・スキーマの事例ではない。
2. メタファーと考えられるが有標ではない。
3. 成人母語話者は直接処理<sup>11</sup>すると考えられる。
4. 幼児・学習者は習得段階の後期になって初めて容易に理解できる。

それぞれについて簡単に説明する。1 は、例えば (11) “I’m down with flu.” や句動詞 “wipe out” に見られる不変化詞が、プロトタイプ的な用法とは考えられないということである。2 は、3.2.3. で挙げた BNC からの具体例や、4.1 で見る不変化詞と共起する補部名詞句や動詞の分布から分かるように、語彙化されたメタファーは成人母語話者の発話に広く見られるが、特に有標な表現とは通常みなされないとということである。3 は、狭義のメタファーと語彙化されたメタファーの間には処理時間に差が見られないため、間接処理が行われているわけではないと考えられるということである。4 は、4.2. と 4.3. で詳述するように、幼児や学習者は習得途中の段階では語彙化されたメタファーの理解・使用に困難を見せ、イメージ・スキーマや概念メタファーを習得した後に理解が容易になると考えられるということである。

このような理由から、筆者は、語彙化されたメタファーは、指示によって得られた指示対象のイメージから抽出されるイメージ・スキーマが、言語共同体において重要な概念メタファーと組み合わさって、不変化詞の語彙的意味として慣習化された意味を体現したものであると主張する。

この語彙化されたメタファーの区分に近いものを認めようとしていると考えられる先行研究も見られる。例えば、Blasko and Connine (1993: 295) は以下のように主張している。

伝統的には、字義通りの言語というのは文脈に依存しない意味であったが、字義通りの言語も比喩的な言語も文脈に依存しないことはまれであり、ほとんど全ての発話がそこで使われている語の定義的な意味よりもずっと多くのことを意味するよう意図されている。全ての言語はわれわれの概念体系の反映として根源的にはメタファー的であるという Lakoff and Johnson (1980) のような主張もあ

<sup>11</sup> 「直接処理モデル」(direct processing models) とは、心理言語学の分野でなされたメタファー研究の 1 つのアプローチで、比喩的な意味が構築される際には文字通りの意味にアクセスはするが、文字通りの解釈を完全に計算してから棄却するわけではないとする立場である (Blasko and Connine 1993: 295-297)。これに対抗するもう 1 つのアプローチが「間接処理モデル」(indirect processing models) で、これは文字通りの解釈が失敗した場合に初めてメタファーの解釈を探るとする立場であり、このアプローチではメタファーの解釈は文字通りの意味の解釈よりも時間がかかるということになる (Ibid.)。



るが、それでもなお、字義通りと比喩的という機能的な区別を主張しつつそういった点を認めることは可能であろうし、そう考えることによって、高度に慣習的な語彙化された意味と、その場で構築されなくてはならない意味の重要な区別が可能になる。

彼らはよく使われるメタファーは語彙化されていると考えることに対しては否定的(Blasko and Connine 1993: 305)だが、その議論は“A is B.”という形の命題メタファーに関するものであり、不変化詞の意味としての語彙化されたメタファーに反するような議論ではない。

Hampe (2000: 87) もまた、字義通りの意味とそうでないもの間に境界的なものがあると主張し、不変化詞の例ではないが(15)が境界の位置にある(両様の解釈ができる)例であるとした。

- (15) She turned round and found herself facing a lion. 「彼女は振り返るとライオンと向かい合っていた/ライオン(という危険)に直面していた。」

Grady(1999)はこのような境界を挟んで見られる関係を“primary scene”と“primary metaphor”と呼んでいるが、Hampe (2000: 87)は(15)のような例が両者間の“cognitive bridge”「認知的な橋渡し」になっていると言う。BNCからの50例に見られるデータを挙げれば、(16)が狭義の字義表現と語彙化されたメタファーの間の認知的な橋渡しになるような用例であると考えられる。

- (16) a. While strikes might be a thing of the past, at least *in* most ports, there has been a marked increase in accidents and sickness rates reported by several operators. Unfortunately, systematic, industry-side data is now a thing of the past for the port industry following the demise of the National Dock Labour Board and the National Association of Port Employers, so it is impossible to determine whether this is a specific or general phenomenon. (K9V 502-503) (この例は「港では」という場所の提示を主目的とした狭義の字義表現だと考えられるが、「港湾という世界・業界では(ストライキは過去のものだ)」という語彙化されたメタファーへの橋渡しになるような例である。)
- b. She had no urge whatever to throw herself *at* Mitch. (HGK 2943) (この例は「身をもたせかける」という物理的なことを指した狭義の字義表現だが、「(身をもたせかけて)相手の気を引く」という語彙化されたメタファーへの橋渡しになるような例である。)
- c. ..., fill *in* the coupon on page 216 and return to us without delay. (G2V 501) (句動詞“fill in”; この例は「文字を書き入れる」という物理的なことを指す狭義の字義表現から、もう少し抽象的に「記入する」ということを指す語彙化されたメタファーへの橋渡しになっている例である。)

- d. *At the August meeting John White said that the DHAC intended to organise tenants' associations.* (APP 983) (この例は場所を指す狭義の字義表現から、出来事の時間の側面を特に指す語彙化されたメタファーへの橋渡しになっている例である。)

### 3.3. 狭義のメタファー

「狭義のメタファー」に該当するのは、概念メタファーでは単純には得られず、字義通りの解釈が偽であり(そのため基本的に真偽判定が可能な命題レベルで発現し)、間接処理され、有標性が高い表現であり、一般に言うところのいわゆる「メタファー」である。具体的には(17)のような例が該当する。

(17) *God is in the details.* 「神は細部に宿る。」

なお, Grady *et al.* (1999) は, 慣習化の度合いが高いメタファーの議論には概念メタファーが有効であり, そうでないものには複数のメンタル・スペースから要素を取り出して結び付ける“blending” (Fauconnier and Turner 1996) が有効であると指摘しているが, この指摘に見られる区分は, 本稿で主張する語彙化されたメタファーと狭義のメタファーの区分に近いと考えられる。

この狭義のメタファーの中でも, さらにメタファー度が高い表現として, イディオムがある。イディオムは, いわゆるメタファーとは違い, 部分(イディオムを構成する個々の語)の意味からは全体の意味が引き出せない言語表現と通常は考えられているが, 心理言語学の研究により, 多くのイディオムにおいてメタファーが大きな機能を果たしていることが明らかになった。例えば Gibbs and O'Brien (1990) は, 怒りを表現するイディオム (“blow one's stack”や“hit the ceiling”など) などの様々なイディオムを英語母語話者の大学生に示し, それらが意味する事態のイメージを答えさせたところ, 怒りのイディオムについての被験者のイメージは, 容器内の液体が沸騰し, 容器が乱暴に圧力を放出するというものでかなり高程度に一致していた。さらに Gibbs (1992) は, イディオムが表現する状況について多くの母語話者が持つイメージと, そのメタファー写像の起点領域の概念構造である典型シナリオ (“prototype scenario”; Lakoff 1987: 397-406) に見られる原因・意図・様態などが一致していることを示した。つまり, 言語共同体で共有されている, 容器内の液体のあり方に関する知識と ANGER IS THE HEAT OF A FLUID IN A CONTAINER というメタファー (Lakoff 1987: 387) によって上記の怒りのイディオムが理解されているということである。一般化すれば, イディオムの意味が概念メタファーによって動機付けられているということである。

ただし, これは全てのイディオムがメタファーによるものであるということを言っているわけではない。例えば “kick the bucket” 「死ぬ」というイディオムは, OED<sup>12</sup> によれば

<sup>12</sup> Oxford English Dictionary, Second Edition, CD-ROM version 3.0.

bucket, *n.2* として“A beam or yoke on which anything may be hung or carried. (用例省略) Hence (perhaps) to kick the bucket; (slang) to die.”とあり、その他俗説として死刑や自殺の時に首に縄をかけて自分が乗っているバケツを自ら蹴って首を絞めることに由来するという説もあるが、いずれにしてもドメイン間の比較・同一視というメタファーの基本構造とこれらの説明は一致しない。後者の俗説の典型シナリオと一致する状況で死ぬことを“kick the bucket”と言うこともあるかもしれないが、必ずしもそのような死に方の場合にのみ“kick the bucket”と言うわけではない。これについて Gibbs and O’Brien (1990: 65) は、全てのイディオムが慣習的なイメージと概念メタファーによって動機付けられているというわけではなく、“kick the bucket”などの多くのイディオムは概念メタファーによる動機付けが十分でなく、“make the scene”「現れる, うまくやる」のように必ずしもしっかりしたイメージが形成できないものもあり、イディオムの意味が予測可能であるということは示されないと認めている。つまり、イディオムの形成にはメタファーが役割を果たしていることが多いが、一般に、意味的に不透明なイディオムは慣習化が進み、もはや個々の語の知識では句全体の意味を扱いきれなくなり、句全体としての語彙的な特性が強くなっている表現である。そのため、習得の観点から言えば、習得後に考えてみれば何らかのつながりは見出せるかもしれないが、拡張による理解・生成は不可能で、語彙項目のような習得が必要である。

なお、BNCから抽出した *in* と *at* を含む各 50 文の例には狭義のメタファーは見られなかった。このことも、狭義のメタファーが低頻度で有標な表現であるということを裏付けている。

### 3.4. 区分の問題

続いて、狭義の字義表現・語彙化されたメタファー・狭義のメタファーの境界区分について考える。

広義のメタファーと非メタファー（狭義の字義表現）をどこで区切るかという問題については、実際には区切れないものというのが、実例をもとに論じる立場に見られる意見である (Cameron 1999: 106)。しかし、メタファーを取り上げて議論するには、当然メタファーとして取り上げるための区切りが必要になる。

筆者は、トラジェクター・ランドマーク・運動/存在様態が客体的・物理的・具体的であるような形で不変化詞が用いられているか否かが、プロトタイプ的な事例である狭義の字義表現と語彙化されたメタファーの境界であると主張する。より具体的に言えば、不変化詞がイメージ・スキーマとそのトポロジー的拡張<sup>13</sup>によって得られる意味のみで構成されている、すなわち具体的な物理空間を指すような形で不変化詞が用いられているものが狭義の字義表現であり、概念メタファーの作用により抽象的な空間だと概念主体が認識する抽象空間や時間や関係などを指す場合の不変化詞の用法が語彙化されたメタファーの表現だということである。

<sup>13</sup> トポロジー的な性質 (topological character) とは、形が違っていてもそれを問題にしないという性質であり、Talmy (2000: 25) は閉鎖類に属する語のイメージ・スキーマにはこのトポロジー的な性質があると言う。

区分の問題に関係する議論を扱った先行研究をここでは2つ挙げる。

Cameron (1999: 120-123) は、have などの脱語彙化した動詞の用法が比喩的に使われているかを判断する手順として次の1~3を示し、その上で、このような決定には恣意性もあるし異論もあるだろうが、少なくとも明示的であり、言語分析の目的は、正しさや真実といったものではなく、まさにこの明示性でなくてはならないと主張している。

1. 該当動詞が慣習的に共起する主語あるいは目的語を特定する。もし動詞がその特定が難しいほどに脱語彙化していれば、その動詞に割り当てられる第一義的で非比喩的な意味と典型的な共起する名詞句を明示的に言明する。
2. 実際の用例中で共起している名詞句と1で特定した名詞句のドメイン間の不調和を確認する。
3. その不調和の潜在的な原因としてのメタファーを排除するような話者の潜在的な誤り、または話者と聴者の間で構築された談話世界内におけるやりとり（その中ではメタファーではない）がないかを確認する。

Cameron (1999: 123) はさらに、前置詞の比喩性も同様の境界の問題を持っていて、空間の意味を第一義とすることで同様の分析が可能であるとしている。

また、池上 (1975: 329-335) は、変化の言語的な表現の類別として運動体・到達点・運動がそれぞれ具体的か抽象的かにより、全て具体的なものを具体的な運動、運動が抽象的なものを抽象的な運動としている。

筆者の見解は Cameron (1999) の議論とも池上 (1975) の議論とも大きな隔たりがあるわけではないと言えよう。この基準に従って実際の言語運用に見られる事例の区分を試みたのが (7-8) と (13-14) である。そして、専ら広く母語話者に共有される概念メタファーに基づくものであるか、あるいは発話者の自由な発想によって表現されたものであり必ずしも発話者の意図が正確に伝わるとは保証されないものであるかが、語彙化されたメタファーと狭義のメタファーの境界であるとする。

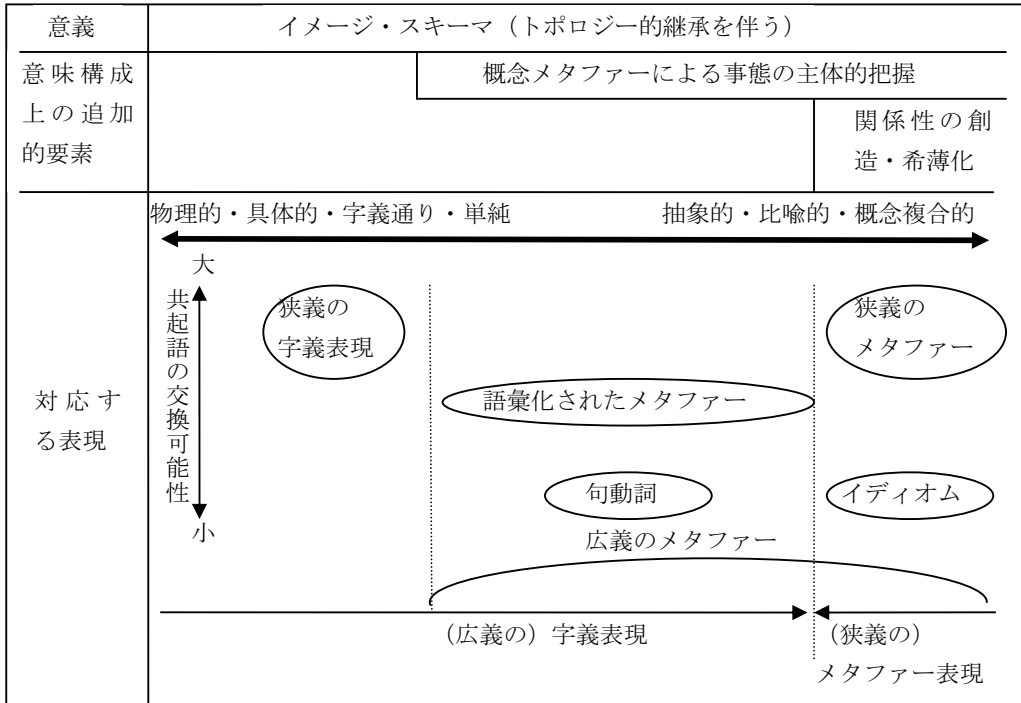
### 3.5. 区分のまとめ

狭義の字義表現は物理空間における存在・運動を指示している限りにおいてはかなり自由に用いることができるが、語彙化されたメタファーになると言語共同体で共有される概念メタファーによる制約を受け、その中でも句動詞については不変化詞とともに用いられる動詞・補部名詞句の自由な交換可能性はさらに低い。そして狭義のメタファーに含まれるイディオムの場合はこの交換可能性は最も低い。このように句動詞とイディオムには慣習化が特に強く働き、表現が固定的になっているという共通性がある。句動詞は語彙化されたメタファーのレベルで表現が固まったものであり、イディオムは狭義のメタファーのレベルで表現が固まったものであるが、表現が固まったというのは、全体としての語彙的性質を持つようになったということであり、メタファー処理のモデルの観点から言えば、これらは語彙的な扱いを受ける直接処理をされると考えられる。イディオムは、その背後にある関係性が、通時的に忘れ去られたなどの何らかの理由で、もはや言語共同体内で共有されなくなつて希薄化しているのに対し、イディオムを除く狭義のメタファーは、ドメ

イン間の関係を創造する自由な発想に基づくものであり、統語的關係を持つ語の交換可能性も高く、間接処理されると考えられる。

これらの観点で、本稿のこれまでの考察をまとめたのが図1である。左側の極には物理的・具体的・字義通り・単純という性質があり、右側の極には抽象的・比喩的・概念複合的な性質がある。

図1：不変化詞の意味の構造



空間不変化詞が表現するランドマーク・トラジェクターの形状や大きさなどは（プロトタイプ性はあるだろうが）重要視されないという、空間不変化詞が属するクラスが持つトポロジー的な性質（注13を参照）により、このように空間不変化詞に特有の、字義通りの意味内での拡張（狭義の字義表現から語彙化されたメタファーへの拡張）とさらにその先（狭義のメタファー）への意味の広がりを実現されている。例えば、(18)～(20)の3つの文を比べると、*in* が徐々に抽象的な関係へと変化しているということが分かる。

- (18) The card is *in* the envelope. 「カードは封筒の中に入っている。」（狭義の字義表現）
- (19) (= (10)) She is *in* white today. 「彼女は今日は白い服を着ている。」（語彙化されたメタファー）
- (20) (= (17)) God is *in* the details. 「神は細部に宿る。」（狭義のメタファー）

#### 4. 区分を支持するデータ

本節では、不変化詞の意味の区分に関する本稿でのこれまでの議論を支持するデータを示す。主にコーパスのデータや先行研究における心理言語学的な実験結果を取り上げ、本稿の主張を裏付ける。

##### 4.1. 成人母語話者のデータ

第一言語習得・第二言語習得のデータと比較するために、本小節ではまず、成人母語話者のデータを概観しておく。

表1は、BNCから抽出した、成人母語話者が *in/at/on* の補部に使用する名詞（補部名詞句から修飾語句を除いたもの）・各不変化詞の直前に用いる動詞（見出し語化済み）の上位30項目のデータである。

表1：成人母語話者のデータで *in/at/on* と共起する名詞・動詞上位30項目

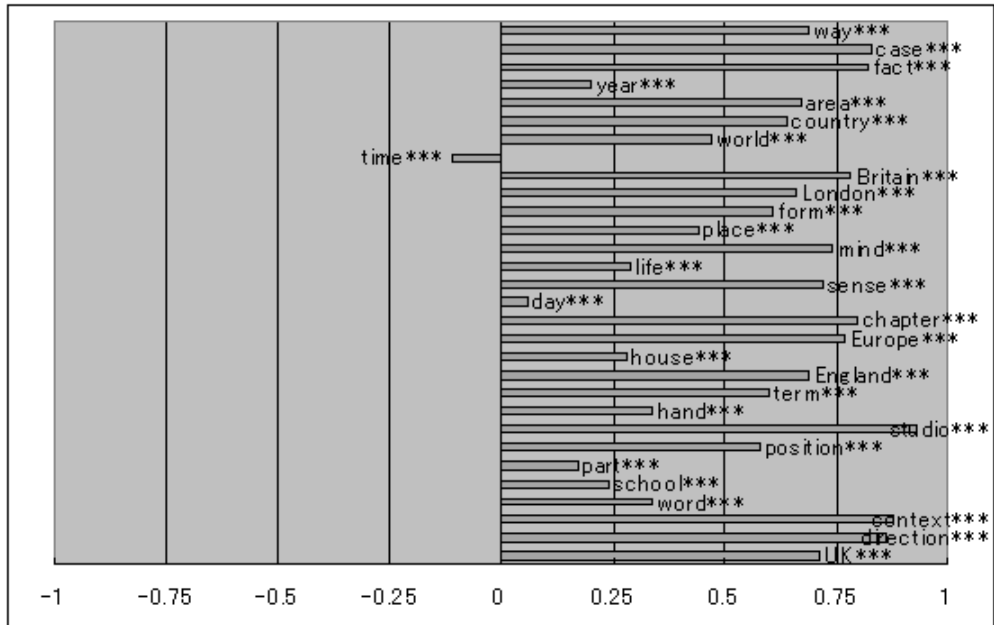
<i>in</i>		<i>at</i>		<i>on</i>	
<i>in</i> + NP	V + <i>in</i>	<i>at</i> + NP	V + <i>at</i>	<i>on</i> + NP	V + <i>on</i>
way	be	time	look	side	be
case	come	end	be	hand	go
fact	live	home	stare	basis	base
year	go	moment	arrive	ground	come
area	work	level	aim	way	depend
country	find	stage	work	occasion	work
world	use	point	glance	day	get
time	do	school	smile	May	sit
Britain	result	work	start	March	take
London	read	rate	stand	April	concentrate
form	see	night	sit	October	carry
place	get	beginning	stay	January	put
mind	hold	age	do	November	rely
life	set	top	hold	September	focus
sense	sit	back	come	June	hold
day	make	meeting	go	December	move
chapter	lie	cost	get	July	lie
Europe	appear	risk	laugh	February	stand
house	have	price	gaze	Saturday	hang
England	show	bottom	live	August	spend
term	put	university	appear	floor	call
hand	bear	centre	play	Sunday	insist
studio	stand	foot	make	page	have

position	occur	door	run	road	comment
part	say	side	stop	face	live
school	die	expense	see	issue	turn
word	take	start	have	back	pass
context	stay	speed	glare	earth	fall

これらの語は各不変化詞との共起頻度が高いだけでなく、不変化詞との連語としての結びつきも概して非常に強い（図2とその説明を参照）。表1を概観すると、狭義の字義表現、語彙化されたメタファー、そして本稿では語彙化されたメタファーに分類されると考える時間の表現を構成する語が幅広く見られる。

図2は、不変化詞と共起語の結びつきの強さを示すために、成人母語話者の *in* の補部名詞句上位30項目の *in* 補部位置への集中の度合いを示したものである<sup>14</sup>。

図2：成人母語話者の *in* の補部名詞句上位30項目とその偏り度



物理空間の表現（area, house 等）、抽象空間の表現（mind, word 等）、時間の表現（year, day 等）、連語表現（*in this way*, *in fact* 等）が幅広く用いられているのが分かる。

(13) で挙げた以外で、図2に挙がっている語を含む、コーパスからの語彙化されたメタファーの実例には (21) のようなものがある。

<sup>14</sup> 値が+1だと *in* の補部にしか用いない、-1だと *in* の補部には用いないということを示す。また、各語に付されている\*\*\*は統計的有意性 ( $p < 0.01$ ) を示す。

- (21) a. ‘There was a genuine anxiety for the boys and the parents *in* this case, .... (FT6 721)  
 b. *In* an ideal world, it would now be the preferred method of evaluating brain pathology .... (HU2 5467) (この例は「(現実の)世界で」という場所を指す狭義の字義表現から、「理想的な世界では」ということを意味する語彙化されたメタファーへの橋渡しになっている例である。)  
 c. *In* other words, for this purpose, and for this purpose only, a minor was to be treated as if it were an adult. (FDC 367)

#### 4.2. 幼児のデータ

本小節では、第一言語習得期のコーパスと成人母語話者のコーパスを対象とした調査に基づき、広義の字義表現内において、発達が進むにつれて習得対象がメタファー度の高い表現へと拡張しており、狭義の字義表現と語彙化されたメタファーが異なる性質を持つということを論じる。

表2は、子供の話し言葉コーパスである The CHILDES database<sup>15</sup> から、各年齢期における *in* の補部名詞句の上位20項目を抽出したものである。(比較のために BNC の上位項目もあわせて載せた。)

表2：各年齢期における *in* の補部名詞句の上位20項目

rank/age	-31ヶ月		31-42ヶ月		43ヶ月-		BNC
1	box	84	house	89	house	72	way
2	house	83	water	76	water	61	case
3	water	71	bag	66	room	57	fact
4	bed	67	bed	66	school	54	year
5	room	52	room	54	car	47	area
6	bag	50	box	48	bed	44	country
7	chair	48	mouth	44	bag	41	world
8	car	47	kitchen	38	back	38	time
9	minute	47	car	36	front	36	Britain
10	zoo	25	hand	29	box	32	London
11	mouth	21	minute	29	morning	32	form
12	cup	20	crib	22	middle	29	place
13	kitchen	20	chair	20	kitchen	28	mind
14	mommy	20	sky	20	mouth	28	life
15	pocket	20	hole	19	hand	26	sense
16	wastebasket	20	corner	18	pocket	24	day
17	air	19	front	17	chair	21	chapter

<sup>15</sup> <http://chilides.psy.cmu.edu/data/>.



18	closet	18	trunk	17	minute	21	Europe
19	hole	18	middle	16	mirror	21	house
20	bath tub	16	pot	16	sky	21	England
21	garage	16	truck	16			term

総じて、幼児のデータで挙げられている名詞はほとんどが物理的な場所を示しているが、特に年齢が低いほど、箱状の、あるいははっきり区切られた物理的な容器状の空間を指す語を多く用いており (22)<sup>16</sup>、年齢が上がると少し拡張された例 (23) が見られるようになることが分かる。

(22) \*FAT: some of her toys are packed ?

\*CHI: yeah .

\*FAT: in what ?

\*FAT: what are they in ?

\*CHI: *in um [//] in big box .*

\*MOT: that's right .

(Bellinger and Gleason (1982); dinner¥patricia.ch; 34 ヶ月)

(23) \*CHI: does dis have a door *in back* of it ?

(Brown (1973); adam¥adam40.cha; 47 ヶ月)

しかし、文全体を見ないと不変化詞部分が狭義の字義表現として使われているのか語彙化されたメタファーとして使われているのか (あるいは狭義のメタファーとして使われているのか) が判断できない場合も多いのは確かであり、表 2 のように補部名詞句のみを切り離れたデータに基づく議論だけでは問題があることも事実である。そこで、動詞として非常に汎用性の高いごく基本的な繫辞である *be* 動詞が使われている (*be + in* のパターン) の 3 歳半から 4 歳半まで (43 ヶ月-54 ヶ月) の子供の用例 329 例を全て文脈の中で確認した。結果、そのうちの約 300 例は (24) のように、物理的に「何かの中に」という物理的空間に関する意味を持つ狭義の字義表現であった。

(24) \*CHI: what's *in* that bottle ?

\*INV: those are some tadpoles .

(Henry (1995), Wilson and Henry (1998); john03.cha; 48 ヶ月)

これは、*be* 動詞という非常に汎用性の高いごく基本的な繫辞を伴う場合でも、子供は不変化詞 *in* を専ら狭義の字義表現で用いているということを示している。

<sup>16</sup> CHILDES のデータのイタリックとボールドは筆者による。その他の表記は元のデータのままである。また、末尾の括弧内には、引用したデータが含まれるコーパスに関する文献・データ収録ファイル名・子供の年齢を付している。以下の CHILDES のデータについても同様。

このように狭義の字義表現は多く見られるが、BNC で最も頻度の高い ‘way’, ‘case’ の使用例 (25-26) が、幼児のデータに見られないということは注目すべき点である。

(25) It is stressed *in* two specific **ways**. (EFT-1608)

(26) I believe that it is important *in* most **cases** for each language to have parity; ...  
(FA3-1324)

これらの例は、物理的なランドマークのない、抽象度の高い語彙化されたメタファーの用法である。このような語彙化されたメタファーが特に年齢が低い幼児の発話にはまだ見られないということは、狭義の字義表現と語彙化されたメタファーが明らかに異なる性質を持ち、語彙化されたメタファーの方が、概念メタファーを必要とするために習得が遅いということを示している。

習得に関する研究を見ても、不変化詞本来の意味が強く感じられるものの習得は早い、そうでないものの習得は遅い傾向があるという報告がある (Friederici 1983)。これらのデータが明らかにする習得の際の順序性は、狭義の字義表現と語彙化されたメタファーが異なる性質を持つものであるということを示すものとも言える。すなわち、(狭義のメタファーは子供の生活現場では発せられることがほとんどないと考えられるが、) 語彙化されたメタファーの表現や事物の関係は、幼児の周囲に遍在しているにもかかわらず、上述の CHILDES のデータが示すように、幼児は言語習得の初期の段階では物理空間に関する意味の発話ばかりを見せるのである。

不変化詞は語彙化されたメタファーの用法を多く持ち ((13-14) などを参照)、そのような表現は言語習得期の子供の周りにあふれているにもかかわらず、幼児が言語を習得する初期段階においては、不変化詞は狭義の字義表現として専ら物理的な移動や存在といった具体的な指示に用いられ、子供が成長して言語能力すなわち認知能力が発達し、慣習的な概念メタファーを身につけるにしたがい、抽象的な関係や状態を指すためにも用いられるようになると考えられる。

### 4.3. 学習者のデータ

本小節では、第二言語習得中の学習者のデータにも、狭義の字義表現と語彙化されたメタファーの区分を支持するデータが見られるということを論じる。

学習者コーパス<sup>17</sup> から日本人学習者の *in* の補部名詞句の上位項目とその偏り度(値が+1 だと *in* の補部位置にしか用いず、-1 だと *in* の補部位置には用いないということを示す) を抽出した結果を示したのが図 3 であり、BNC から抽出した成人母語話者のデータと日本

<sup>17</sup> (1) 「日本人英語学習者コーパス」プロジェクト (<http://www.eng.ritsumei.ac.jp/lcorpus/index-j.html>) の成果である、日本人の大学生が書いた作文コーパス (約 32,500 語) と、(2) 筆者独自のコーパスから成る約 43,500 語のコーパス。筆者独自のコーパスは、インターネットの検索エンジン Google (<http://www.google.co.jp/>) を利用して、(2a) 「Japanese Sorry “poor English”」を検索キーにしてウェブ全体から検索して日本人が英語で書いたと思われるテキストを集めたものと、(2b) 「“English diary”」を検索キーにして日本語のページを検索して日本人が英語で書いた日記と思われるテキストを集めたものから成り、規模は約 11,200 語。

人学習者の *in* の補部名詞句の上位項目の偏り度 (+1 に近いほど学習者が過剰使用, -1 に近いほど過小使用) を示したのが図 4 である。

図 3 : 日本人学習者の *in* の補部名詞句上位項目とその偏り度

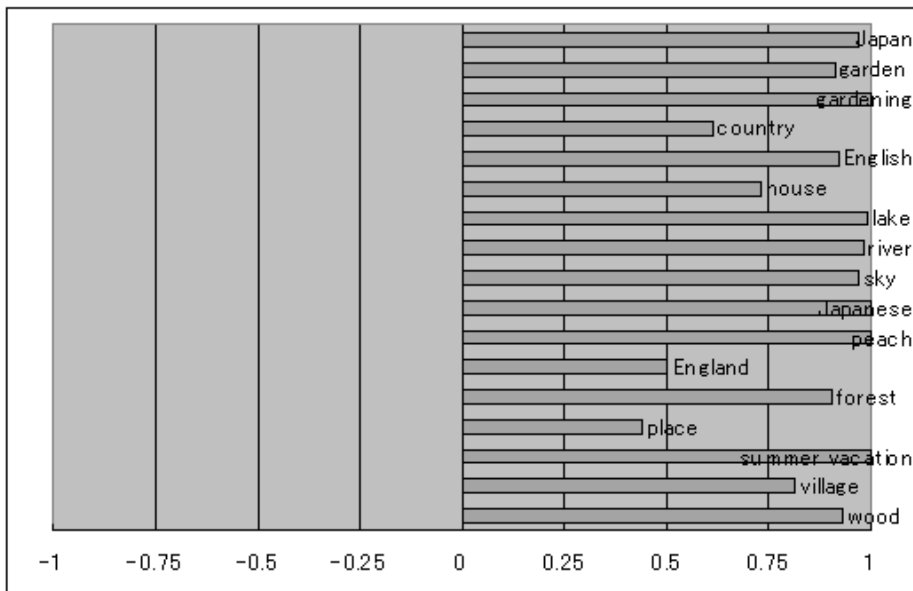
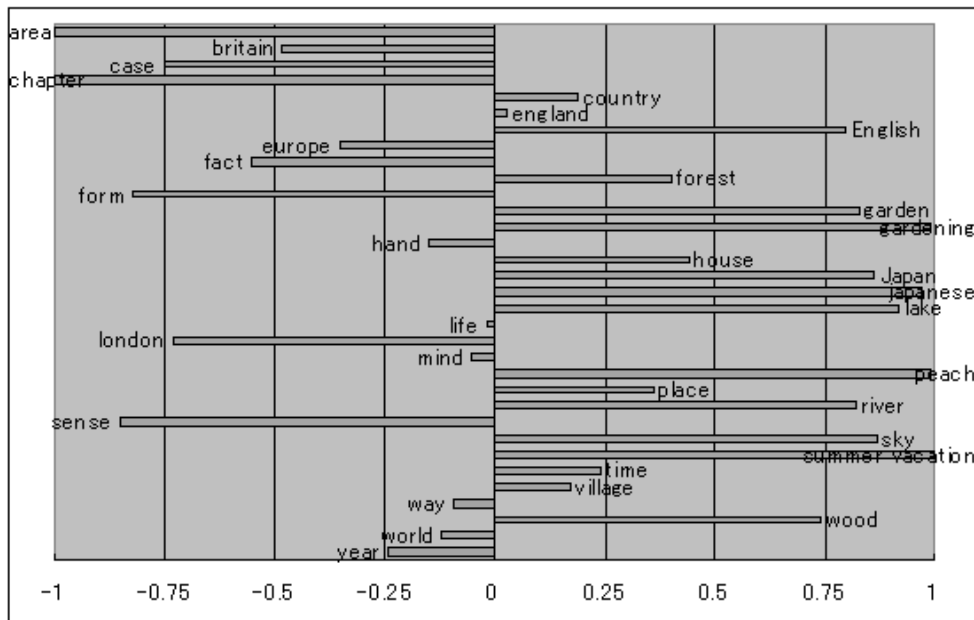


図 4 : 成人母語話者・日本人学習者の *in* の補部名詞句上位項目とその偏り度



これらのデータが直接的に示すのは、学習者と母語話者の *in* の補部名詞句の使い方に大きな差があるということだが、それは、学習者が *in* の意味を母語話者と同様にはとらえていないということでもある<sup>18</sup>。学習者が必ずしも母語話者と同じように発話する必要はないという議論はここではおいて、少なくとも一般には母語話者の発話をモデルとして学習しながら、そのモデルとの乖離が大きいのであれば、学習が十分にうまくいっているとは言えないと言わざるを得ないだろう。このような母語話者と学習者のずれの大きな原因は、概念メタファーに基づくコロケーションが理解されていないということであると考えられる。例えば、学習者は‘life’を *in* の補部位置では過少使用しており、学習者コーパスでは *in* と‘life’の共起例は (27a-b)<sup>19</sup> の 2 例だけであったが、これは LIFE IS A CONTAINER (Lakoff and Johnson 1980: 51) という概念メタファーを学習者が知識として持っていないためであると考えられる。

- (27) a. But this kind of experience has been *in* your real **life**, hasn't it? (“How Far Did the Kite Go?”のデータ<sup>20</sup>に含まれる大学3年生の作文)
- b. I think that Traveling discover things which we don't see *in* everyday-**life**. (“Traveling” and “Gardening”のデータ<sup>21</sup> の travel2.txt に含まれる大学2年生の作文)

また、筆者は7人の専門学校校の学生<sup>22</sup>に対して、Rice (1996: 148-152) の実験 (3.1.を参照) にならった小規模な実験的なテストを実施した。その結果が表3である<sup>23</sup>。

表3：学習者の不変化詞を使った自由作文における不変化詞の意味の分布

	Spatial	Temporal	Abstract	Phrasal Verb	TOTAL
<i>at</i>	5	9	2	3	19
<i>on</i>	13	4	3	1	21
<i>in</i>	22	4	5	—	31

なお、ここで *abstract* に分類されているのは (28a-j)<sup>24</sup> の作文である。

- (28) a. He is good *at* English. (中国人/6年)
- b. I am *in* kimono. (日本人/5年)

<sup>18</sup> もともとの過少使用 (area, case, form, sense) やもともと過剰使用 (place) についても別途検討が必要だが、それは本稿の目的を超えているためここでは扱わない。

<sup>19</sup> 誤りも学生の作文の通りであり、イタリック・ボールドの強調は筆者による。

<sup>20</sup> <http://www.eng.ritsumei.ac.jp/lcorpus/data/asao02/>。

<sup>21</sup> <http://www.eng.ritsumei.ac.jp/lcorpus/data/asao01/>。

<sup>22</sup> 日本人学生3名 (自己申告による英語学習歴は5年・7年・11年) と中国人学生4名 (同じく3年・6年・10年・10年)。

<sup>23</sup> Riceの実験同様、1人につき10文の作文を指示したが、全員10文を考えて書くことはできなかった。

<sup>24</sup> 誤りも学生の作文の通りであり、イタリックの強調は筆者による。

- c. She is *in* a bad mood. (中国人/10年 a)
- d. At first I couldn't speak and write *in* Japanese. (中国人/10年 a)
- e. He met his old friend *on* his way home. (中国人/10年 a)
- f. He goes to work *on* foot. (中国人/10年 a)
- g. She was angry *at* John. (中国人/10年 a)
- h. Interested *in* English. (日本人/11年)
- i. I have *fallen in* love with her. (中国人/10年 b)
- j. His DVD now *on* sale. (日本人/7年)

非常に小規模な実験であるが、(28a-j)の抽象的な意味に分類される例の多くは成句的なものであり、やはり語彙化されたメタファーの使用は難しいということが示されていると言えよう<sup>25</sup>。

日本人学習者が英語の語の意味を習得する難しさについて、東(1981: 105)は次のように指摘している。

・・・言語外の指示物、つまり問題の事物とか場面の同一性をもとに語とか表現の意味の一致を確かめるといふ・・・いわば自然的方式にさえよらずに、英語の単語に訳語を機械的に当てはめ、それで英語を理解したつもりになる傾向が強い。これは母国語の世界認識に対する拘束力がほとんど圧倒的であることに加えて、英語学習の初期から単語帳によって日英語の「換算学習」をする習慣が根強いからであろう。

これは不変化詞についての指摘ではないが、経験に基づく概念としてのイメージ・スキーマを持つ空間の不変化詞をなぜ学習者がうまく理解・使用できないのかという問題に答えている見解だと言える。

第一言語習得の場合と同様に、学習者は(ある程度学習段階が進んだ学習者であっても)語彙化されたメタファーを理解することはできても、発信はできないことも多い。イメージ・スキーマを理解したとしても、語彙化されたメタファーにおいて重要な役割を果たす概念メタファーについてはほとんど注意が向けられることがなく、明示的・暗黙的を問わず、概念メタファーを知識として持っていないことが多いためと考えられる。そのため、類推が容易な場合や、たまたま母語にも近い概念メタファーが存在する場合には、語彙化されたメタファーが理解できることもあるが、自分から語彙化されたメタファーの表現を使えるようになるためには、母語話者の言語共同体が共有する慣習化された概念メタファーの習得が必須であると考えられる。

以上の考察をまとめると、狭義の字義表現と語彙化されたメタファーの区分の存在を想定することにより、第二言語習得中の学習者に見られる学習上の困難の一部が説明でき、かつその支援となり得る一方策が得られるということが言える。

<sup>25</sup> 「中国人/10年 a」の学生は習熟度が高いが、それは(10c-g)にも現れている。

## 5. まとめと今後の課題

英語の不変化詞の意味には、(1) 物理空間に関する狭義の字義表現とそこから抽出されて形成されるプロトタイプ的な概念であるイメージ・スキーマが中核として存在し、さらに(2) 言語共同体で共有される概念メタファーを通して理解されるものの成人母語話者であればメタファーとは意識しない語彙化されたメタファー、そして(3) 概念メタファーが言語共同体内で共有されていない狭義のメタファーという3つの範疇区分を設定することが可能であるということ論じた。そして、語彙化されたメタファーが具体的な指示の一段階上にあるやや比喩的なことを意味し、具体的な意味から抽象的な意味への仲介となる重要な区分であると主張した。

今後の課題としては、句動詞・イディオム等も含む動詞句のレベルでの包括的な議論が必要である。例えば、脱語彙化した動詞 (make, put, have, do など) が共起する名詞句によって多様な用例を示す (Cameron 1999: 109) というのと、空間不変化詞が共起する(動詞や)名詞句によって多様な用例を示すことの間にはある種の共通性が認められるかもしれないと考えられる。さらに進んで、補部をとるということは、前置詞・動詞のスキーマに合わせて補部名詞句の意味の一側面に焦点を当てたりあるいは前置詞・動詞の本来的なドメインに合わせた解釈を要求したりすることであるとまで言えるかもしれない。今後はこのようなより高次の言語表現一般との関係を明らかにすることを目指したい。

さらに、語彙化されたメタファーの区分の存在を念頭に置いて、不変化詞の網羅的な意味記述をした上で、学習者が困難を覚える不変化詞の用法を、その原因とともに記述することを目指したい。

## 引用・参考文献

- Bellinger, D. and J. Gleason. 1982. "Sex Differences in Parental Directives to Young Children." In *Journal of Sex Roles*, 8, pp. 1123–1139.
- Biber, D., S. Johansson, G. Leech, S. Conrad and E. Finegan. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Pearson Education.
- Blasko, D. G. and C. M. Connine. 1993. "Effects of Familiarity and Aptness on Metaphor Processing". In *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, Vol. 19, No. 2, pp. 295-308.
- Bolinger, D. 1971. *The Phrasal Verb in English*. Harvard University Press.
- Brown, R. 1973. *A First Language: The Early Stages*. Harvard University Press.
- Cameron, L. 1999. "Identifying and Describing Metaphor in Spoken Discourse Data." In Cameron, L. and G. Low, eds., *Researching and Applying Metaphor*, Cambridge University Press, pp. 105-132.
- Fauconnier, G. and M. Turner. 1996. "Blending as a Central Process of Grammar." In Goldberg, A., ed., *Conceptual Structure, Discourse and Language*, CSLI, pp. 113-130.
- Fillmore, C. J. 1982. "Towards a Descriptive Framework for Spatial Deixis." In Jarvella, R. J. and

- W. Klein, eds., *Speech, Place, and Action*, John Wiley & Sons Ltd, pp. 31-59.
- Friederici, A. D. 1983. "Children's Sensitivity to Function Words during Sentence Comprehension." In *Linguistics*, 21, pp. 717-739.
- Gibbs, R. W. 1992. "What Do Idioms Really Mean?" In *Journal of Memory and Language*, 31, pp. 485-506.
- Gibbs, R. W. and J. O'Brien. 1990. "Idioms and Mental Imagery: The Metaphorical Motivation for Idiomatic Meaning." In *Cognition*, 36, pp. 35-68.
- Grady, J. 1999. "A Typology of Motivation for Conceptual Metaphor: Correlation vs. Resemblance." In Gibbs, R. W. and G. J. Steen, eds., *Metaphor in Cognitive Linguistics: Selected Papers from the Fifth International Cognitive Linguistics Conference, Amsterdam, 1997*, John Benjamins, pp. 79-100.
- Grady, J., T. Oakley and S. Coulson. 1999. "Blending and Metaphor." In Gibbs, R. W. and G. J. Steen, eds., *Metaphor in Cognitive Linguistics: Selected Papers from the Fifth International Cognitive Linguistics Conference, Amsterdam, 1997*, John Benjamins, pp. 101-124.
- Hampe, B. 2000. "Facing Up to the Meaning of 'Face Up to': A Cognitive Semantico-Pragmatic Analysis of an English Verb-Particle Construction." In Foolen, A. and F. V. D. Leek, eds., *Constructions in Cognitive Linguistics: Selected Papers From the Fifth International Cognitive Linguistics Conference, Amsterdam, 1997*, John Benjamins, pp. 81-101.
- Henry, A. 1995. *Belfast English and Standard English: Dialect Variation and Parameter Setting*. Oxford University Press.
- Lakoff, G. 1987. *Woman, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. The University of Chicago Press.
- Lakoff, G. and M. Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. The University of Chicago Press.
- Mandler, J. 1991. "Prelinguistic Primitives." In Sutton, L. A. and C. Johnson, eds., *Proceedings of the Seventeenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, Berkeley Linguistics Society, pp. 414-425.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
- Rice, S. 1996. "Prepositional Prototypes." In Püts, M. and R. Dirven, eds., *The Construal of Space in Language and Thought*, Mouton de Gruyter, pp. 135-165.
- Rosch, E. 1973. "On the Internal Structure of Perceptual and Semantic Categories." In Moore, T. E., ed., *Cognitive Development and the Acquisition of Language*, Academic Press, pp. 111-144.
- Talmy, L. 2000. *Toward a Cognitive Semantics, Volume I: Concept Structuring System*. The MIT Press.
- Tyler, A. and V. Evans. 2003. *The Semantics of English Prepositions: Spatial Scenes, Embodied Meaning and Cognition*. Cambridge University Press.
- Wilson, J. and A. Henry. 1998. "Parameter Setting within a Socially Realistic Linguistics." In

*Language in Society*, 27, pp. 1-21.

池上嘉彦. 1975. 『意味論』大修館書店.

石井康毅. 2004. 「不変化詞（前置詞・副詞）によるメタファー表現の考察 -子供のコーパスに基づく認知言語学的視点からの考察-」. 『言語情報学研究報告 3 コーパス言語学における構文分析』東京外国語大学大学院地域文化研究科 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」, pp. 157-177.

石井康毅. 2005 (予定). 「英語の不変化詞に見られる意味の階層性 —メタファーの観点より—」. 『言語情報学研究報告 9』東京外国語大学大学院地域文化研究科 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」.

東信行. 1981. 「機語義の比較」. 國廣哲彌（編）『日英語比較講座 第3巻 意味と語彙』大修館書店, pp. 101-163.